千夜詠
表紙イラスト：成沢空
聖騎士
クレイア
恥辱牝狩り
二次元ぷち文庫
2D PETIT POCKET NOVELS
試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『聖騎士クレイア　恥辱牝狩り』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

聖騎士
クレイア
恥辱牝狩り
千夜詠
表紙／成沢空
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

クレイア

聖騎士として悪魔を断つ。特別鼻が利き、悪魔の臭いを感知することができる。鼻筋の整った清楚さと気品を持った顔立ちをしている。

コルネオ

上級異端審問官。クレイアの存在を疎ましく思っている。

黄金に血を一滴零したような、そんな色をした満月が浮かんでいた。大聖堂のある市街地よりほどなく離れた丘の一軒家に一団が到着したのは日付が変わる深夜だった。真っ黒な法衣を着たやせ細った男と帷子に身を包み長槍で武装したこの集団は、俗に魔女狩り隊と呼ばれる教会直属の憲兵達である。

闇夜の静けさを甲高い悲鳴が裂いた。

「いやぁあっ！　な、何かの間違いです。私は、そんな、ま、魔女なんかでは……」

質素な木造からの懇願する叫びが空しく響いた。彼女の父親は絶望と悔しさの混じった顔のまま兵士の放った後頭部への一撃によって床に伏している。小さく呻くだけで意識はこの悲劇の現実を拒否するかのようにあるべきところへと帰ってこなかった。

「人心を惑わす魔女であるとの投書があった。たった今より検分を行う。じっくり、調べさせてもらおうか。ひひ……」

憲兵によって両腕を押さえられた女の前に、隊の責任者が立った。下級の異端審問官のその濁りきった瞳に見つめられるだけで、つい先日婚約を交わしたばかりの生娘は全身を震わせる。長いストレートの黒髪をした美しい娘であった。スレンダーではあったが、薄生地の素肌に張りつくような寝間着では柔らかそうに隆起した女性特有の丸みがはっきりと確認できる。劣情にとり憑かれ、薄ら笑いを浮かべる兵士達の視線がその怯えきった肢体にねっとりと絡みついていた。

「その邪魔な衣服を脱がせてしまえ。魔女の刻印を探すのだ」
その命が下り終えるかという刹那に、女の寝間着はビリビリと引き裂かれた。
「ひいい……いっ！　いやっ、いやぁああ……っ」
屈強な兵士の図太い腕が二人がかりで暴れる彼女を床に寝かし押さえつける。更に二人分の手が伸びて、頼りなくも一途に秘部を隠し通してきた下着が脱がされた。
仰向けにされ、両手足の自由を奪われ、女は一度観念した。魔女狩り隊に目を付けられたら最後。後は死よりも苦しい恥辱と拷問が待ち受けている。もうこれは決まってしまった運命だった。
だが、剥き出しにされた股間、そこは思春期以降は親も見たことのない場所、に薄気味悪い男の顔が入り込んでくると、耐え難い羞恥に心から喘いだ。
「ああ……っ、そ、そんなところっ、み、見ないでぇっ！」
ぎゅっと閉じた瞳から涙が零れていく。
「何を言う。魔女は一番見つからない場所に刻印を隠すのだ。おお、このヌメヌメした肉の裂け目にある、これはなんだ？」
「やめてぇっ、やめてくださいっ！　な、何もございません」
「むむっ、臭う、臭うぞ。ぷんぷんといやらしく男を惑わす臭いが。これは、もっと確かめねば……」

下卑た兵士達の笑い声に混じって、くんくんと鼻を鳴らす音が聞こえてくる。死んでしまいたい、と女は思った。これ以上の羞恥がこの先いったいどれほどこの哀れな身に降りかかってくるのだろうか。舌を噛み切ってしまおうか？　頭にそんな考えが過ったその時だった。

「本当に臭いますね」

可憐さに凛々しさを含ませた、そんな声だった。

「誰だ！」

下級審問官と兵士達が一斉に振り返る。開け放たれた入り口に立つ彼女の姿を一目見た女は呟いた。

「て、天使様……」

戸口から流れ込んでくる風が、肩にかかるくらいに伸ばされた金髪を揺らしていた。それは日の光を浴びたせせらぎのように煌めいている。大きな瞳は南国の海を思わせる透き通った青で、今は鋭く細められていた。女に視線を向けると、慈愛と悲しみに溢れ、次の瞬間には強い意志を滲ませる。純白のミニドレスを纏って、細身の剣を腰に携えているところを見れば彼女は騎士であろう。ただ防具と呼べるものは、銀の胸当てだけで、それも心臓を隠すだけに止まっていた。その上にたわわな乳房の形状が浮かび上がっている。ドレスと一体化したコルセットに腰まわりが引き絞られているせいもあって、胸の美しい球

体脂肪は大きめのメロンを詰め込んだように目立っている。やはり白のブーツが膝上まで覆い、裾との合間に覗けるむっちりした太股から濃厚な女を匂わせていた。だが清純さと凛々しさを併せ持った雰囲気が誰の侵食をも拒んでいる。

「お、お前……いや、貴女様は……っ！」

死人のような審問官の顔色が更に蒼白になって、苦々しく唇を噛む。言葉を失った彼の代わりに一人の兵士が呟いた。

「聖騎士、クレイア様……」

ゆっくりと金髪の女性は一団に歩み寄る。流される鋭い視線に魔女狩り隊はたじろいだ。

「容疑者は、まず教会に連行して、女性の肉体検分は女官が行うはずではないのですか？」

美声が低く抑えられ、静かな口調に怒りを込めているようだった。

「こ、これは、急を要する事態でして……」

「邪魔者が入ると困るから、でしょうか？」

兵士達の額から汗が滲んでいる。審問官は焦りを露に立ち上がった。

「この女はいやらしい臭いで男を惑わすのです。直ぐにでも確かめねば、皆、狂わされてしまう」

クレイアは酷く蔑んだ瞳を審問官に向けた。

「確かに、臭いますね。どぶ川のような嫌な臭い。悪魔の臭い。それは、貴方から……」

皮の水袋を素早く開き、美麗の騎士は液体を濁った瞳の男に振りかけた。直後、
「ぐぎゃあぁぁ……っ！　こ、こではぁっ！」
その水のかかった頬の部分からジューと焼け焦げた臭いと湯気が上がっていく。苦悶に歪めた顔が憎悪に変わり、焼け爛れた部分から真っ黒な体毛が現れ出た。
「聖地エリヌスより賜った聖水です。私の鼻は誤魔化せませんよ、下劣なる魔人」
やせこけていた体が筋肉質に盛り上がる。人の皮膚が裂かれて、鱗交じりの黒い皮膚が覗けだす。異形の姿を露になってくると、仕えていた兵士達も戦いて絶望を表す叫びと共に逃げ出した。
「まったく、情欲に狂わされていたとはいえ、一度は悪魔と戦おうと志したのでしょうに」
侮蔑を込めてクレイアは吐き捨てるように言った。向き直ると審問官だったものはその本性を完全に現している。聖騎士は腰の細剣を抜いた。
「グエエェェ……、か、下等生物の、ぶ、ぶ、分際いっ、でえええっえ」
ヒュン！
「グエっ⁉」
「耳障りです。その声」
魔人の鮮血を思い起こさせる真っ赤な瞳が捉えられないほどの速さ。聖騎士は懐に飛び込み、剣先は喉元を貫いていた。

「これも聖火にて鍛えられた剣です。今、闇に還して差し上げます」
ズバババッッ！　身の毛もよだつ悪魔の断末魔の叫びが月夜に木霊した。

プレートアースというこの大陸の名の通り、人々はこの地を中心に太陽も月も星も巡っているのだと信じている。そんな時代だった。
神への敵対者は太古よりその存在を認められ、それは狡猾に人の心に疑念の根を伸ばし絡みつかせてきた。真なる神の代行者がまだ大勢いた頃は、その特殊な能力で大事を未然に防ぎ、民は比較的穏やかな暮らしを営んできた。それがここ数十年、大陸の様相は一変している。
最初は小さな村で起こった噂からで、他所からこの地にやってきた家族が悪魔と密会しているとのことだった。教会が直に取り調べを行い、虚実であったか、真実であったかは定かではないが、この家族は魔女として断罪された。この地方に例のない裕福な家庭であった。処刑の直後、崩れそうな古い教会は外装を金箔されて建て直されている。魔女狩りが大陸中に広がったのは、それから間もなくのことだ。
クレイアが聖騎士になったのは三年前。彼女が十六歳の誕生日を迎えた時だった。クレイアの父親は彼女が十三歳の時まで人々から慕われた司教であった。魔女狩りの吹き荒れだしたこの時代を嘆き、罪もなく囚われた人々を多く救ってきたのだ。その彼が司教でな

くなったのは死が原因である。悪魔との戦いにおいて殉職したと聞かされている。

その頃にはもうクレイアは自分の特殊な能力の自覚があった。それは真なる神の代行者が持っていた力の一つ、特別鼻が利き悪魔の臭いを感知することができた。彼女はその力を持ってすれば、亡き父の意志を継いで罪なき人々を救い、本当に憎むべき者を処断することができると信じた。

聖地エリヌスでの修行を終えて聖騎士の称号を与えられた彼女が、故郷であるここレリンクに戻って三年、たった一人で魔女の嫌疑をかけられた多くの人を救ってきた。本日もまた昨晩の一件を大司教に報告しに大聖堂を訪れている。

（クレイアか……、厄介な聖騎士め……）

檜造りの大きな扉から現れた彼女を見て、上級異端審問官コルネオは眉根を微かに上げた。クレイアがこちらに気付くよりも前に彼は顔を柔和に繕う。同時に視線がその麗しき姿を舐め回した。鼻筋の整った清楚さと気品を持った顔立ち。歩み来るたびにやけに目立つ胸元の膨らみが弾力を誇るかのようにぷるんと揺れている。動きやすいように丈短い裾下に覗ける太股がまたむっちりとしてそそられるではないか。

「んっ！　コルネオ様ですか……」

顎鬚を生やした厳つい中年男に気付いて、彼女は軽く会釈してくるが、どこか蔑みを含んだように冷たく表情を崩さない。

クレイアは一度深呼吸をした。仕事のことを考えれば、直にこんな忌まわしい反応は治まってしまうだろう。先日の晩の記録簿をつけるのがまだだった。彼女が民家に乗り込んだその時見た光景は、

（あの娘……、男達にあんな風に無理やり裸にされて、押さえつけられて……。なんて恥ずかしい姿……。あっ、い、いや……っ）

肉芽が包皮を捲ってきた。内側から股間に張りついた下着を押して、生地に過敏な部分が擦れてしまう。

「はうっ！　はあ、ぁああ……、ど、どうして……？」

立ち止まった。肉体が強い悦楽に震えてしまう。数年ぶりに味わう女芯からくる快感は、今日は閑散としているとはいえ、幾人も人通りのある街の往来で、だった。

つい悩ましげな悲鳴を上げてしまい、何人かが美麗の女騎士に振り返った。すぐさま視線を感じる。性的な刺激に喘いだ事実を気付かれてしまったような気になって、クレイアは顔を上げることができなくなった。

（そ、そんなはず、ないわ。とにかく、詰め所に……）

歩き出すのが怖い。かといってあからさまに乳房や股間を押さえつければそれこそ破廉恥な格好になってしまうだろう。

（自然に……、何事もないように……）

ページ（ページ）試し読み スタート！

ゆっくりと一歩を踏み出した。途端に、ぬちゃ、と滑る感触が股間の肉裂に感じてしまう。
「やっ……やです。そんな……」
太股の動きに合わせて肉ビラがぬちゅぬちゅと擦れていく。確かな潤いを覚えて、いやらしい蜜液が下着に染み込みだすと、そこから甘酸っぱい臭いがクレイアの鼻腔に届き始めた。
（ああっ、なんて、猥褻な臭い……）
それは特別鼻の効く彼女にしか分からなかっただろう。だが周囲に漏れてしまっていると錯覚させられる。聖騎士は落ち着きなく辺りを見回した。美麗な彼女はただでさえ人目について、絶えず男性からは少し欲望の篭った、女性からは羨望の眼差しが、付き纏っていたのだが、これまでそれを意識したことはなかった。
チラチラと見られている。街中でオマ〇コ濡らして、発情した臭いをプンプンさせている女。そんな風に思われているように感じてしまうと、羞恥という油を注がれて秘芯が燃え上がってしまうのだ。
（ち、違います。私は、そ、そんな女では……。はあ、はあ、体調が、悪いのだわ。早く、帰らなくては……）
歩みを急がせる。だが自分では無駄と思える大きすぎる乳房がぶるんと何度も揺れて、そこから淫らな心地良さが湧き起こってしまう。全身が熱くて、股間から溶けだしてしま

っているかのように思えた。じわじわ染み出した淫蜜は、溢れるほどになって、下着全体を湿らせてくる。まだ清々しい季節にも拘らず、乳房の周辺から腋の下、そしてミニ丈の内側が特に蒸れて汗ばんでいた。

「ふはぁ、はあ……、こんな、状態では、詰め所に帰れません。はあ、はあ、せめて汗を……あれを拭かなくては……」

純白の小さなショーツは着飾らないクレイアのささやかな秘密のおしゃれだったが、それではもはや止め処なく滲み出る愛液を吸い込めなくなってしまった。粘質の液体の感触がツツッと股内側を伝っていった。

（み、見られてしまうわ！　いや、いや、どこか、人気のない場所は……）

キョロキョロと挙動不審に街を見回す。どの店も閉まっていて厠を借りることもできそうにない。あばら家の塀、植樹された木の陰、どちらも充分に身を隠すには至らない。幾つもの裏路地へと通じる入り口に目をやった。

「ああ！　どうしてですの？」

普段はサボることばかり考えているような常駐の兵士達が、今日に限って大勢出ている。しかも裏路地に通じる場所を図ったように塞いでいるのだ。

――あそこを拭きたい……。

どうしようもなく募ってくる。早熟から成熟へと段階を進めた肉体が欲求を強烈に訴え

始めた。またあの甘い花弁の香が鼻腔に届いて、気持ちのよい朦朧感に包まれる。その霞んだ瞳で、ぐちょぐちょに濡れた女陰を見つからずに弄れる場所を物色した。

（ふあ、はあぁ……ぁ、あ、あそこには、誰も……）

無意識に両の太股を擦りつけあうようにしている。その動作で前と進むと、くねくねと腰が動いて突き出されたようなお尻が大きく振られた。

その場所だけ兵士がいない。路地は大きな邸宅に挟まれていて、丁度人一人が通れる程度だった。どちらの壁面にも窓はなく、この向こうは市内を縦断する川が流れていて人が寄ってくることはないだろう。

「ここまで奥に入れば、はあ、はあ、み、見られないで……」

もう一度、クレイアは路地の出口に視線を送った。人影は見られない。

壁に背を預けるような格好になって、彼女は薔薇の刺繍の施されたハンカチを取り出した。

裾に手をかけた瞬間、そこを熱篭った悩ましげな表情で見つめ、生唾を飲み込んだ。

「はやく、んっ、はあ、拭いて、しまわないと……」

街中で自らスカート部を捲り上げる。その行為に何故かしら高揚とした興奮を覚えてしまう。意識はしなかったが。

「あっ、はあ……ぁ、ああっ！　こ、こんなに……っ！」

純白のショーツに元の色はなかった。濡れ透けてほんのりと下の肌色が見え、髪よりも少し濃いめの金色をした恥毛が浮き上がっていた。ねっとりと光沢していて、それは股の内側半分まで広がっている。自分の能力を恨めしく思うほど淫猥な香りが濃厚に立ち昇って、蒸れ湿気に混じっているのが汗だけでないのを嫌でも分からせた。

（こ、こんなにいやらしいもので汚れて……）

ハンカチを股内に押し当てる。するとゾクゾクするような心地良さを感じて、同時に乳房と肉裂の奥からどうしようもなく切なさが湧いてしまう。

「ふぁっ、は、はぁぁ……」

全身が快熱に包まれている。思考が桃色の霞に呑まれていくようで、とろんと落ちてきた瞳に映ったのは、あの使い込まれた女陰のような色をした花だった。この狭い路地裏にだけ無数に植えてあることに今やっと気付く。余りにも不自然だった。だがこの時のクレイアにとってはどうでもよかった。

「ふ、拭かなくては……。んっ、はあっ、は……っ、拭くだけなんです……」

潤んでしまった瞳が、濡れつくして張りついた股間の薄布の、ほんの小さく盛り上げられた箇所を愛しそうに見つめた。

（ああ、クリトリスが、こ、こんなに目立つほど大きくなって……。ぁはあっ、なんて、いやらしい……）

ねっとりと淫蜜の絡んだハンカチを透けた下着の上に押しつける。
「ひゃうっ！　はぁああ……」
ビクッと腰から背筋が跳ねた。ずっと忘れていた性の悦楽が肉体を支配し始めて、ジーンと痺れさせられる快感に酔ってしまう。女騎士は頭を振った。
「じ、自慰などでは……ないわ。んっ、汚れを拭っている、はぁ、はぁ、だけ……」
再び狭路地の出口に視線を向けて、誰もいないことを確認する。眉顰めながら、膝を少し曲げて下品に股間を広げる格好をすると、その羞恥に蜜口が勝手に開きだす。
「いや……っ、また、奥から、あふっ、出てきちゃう……」
自分でも分かるほど肉壷がヒクついていた。下着から滲み出たぬちゃぬちゃした淫蜜は驚くほどの速さでハンカチの生地を満たす。
――塞ぎたい……。いやらしいお汁を垂れ流す猥褻な孔を何かで埋めてしまいたい……。
病んだ場所を押さえるのと同じことだと、クレイアはその衝動に理由をつけた。
「んっ……っ！　はぁああっ……あうっ、うん……」
脇から濡れ下着の内側に指先を潜り込ませた瞬間、ぷっくりと柔らかそうな桜色の唇が震えながら開いた。何時の間にかその奥は唾液が溜まり込んで、舌腹と口蓋に無数の糸を引く。
（あ、熱い……）

指先が焼け爛れるのではないかと思うほど、肉裂の内側は沸騰したポタージュのようで、どろどろに蕩けていた。

ぐちゅっ！　ぬちゅぬちゅ……っ！　滑りきった肉ビラが合間に差し込んだ二本の指に纏わりついた。

――あぁっ、オマ〇コもっと掻き回したいっ――

そう感じた途端、理性が肉欲にどこかに追いやられそうになる。

「だめ、だめだわ……。くっ、ふうぅうっ、塞ぐだけ、はぁはぁ、塞ぐだけですの……」

――でも、ずっと我慢してきたのだもの。ちょっとだけ……。

腫れ上がった肉芽がピリピリと疼いて、慰めて欲しいと切実に訴えかけてくる。強烈な欲求に泣き叫びそうになって、女騎士は声を殺すために淫蜜に濡れきったハンカチを自ら唇に押し込んだ。

濃厚な猥褻な香が鼻腔を埋める。これで盛りのついた牝のようないやらしい声が大通りまで届くことはないと刹那思った瞬間、激しく指先が蠢いた。

「むふぅっ！　んぐっ、んんうんっうううっ！」

ぬちゅっ！　ぐちょぐちょっ！　中指と人差し指が深く牝粘膜を割り込んで、脇からぷちゅっと淫蜜が迸った。ポタ！　ポタ！　と黴臭い地表に滴り落ちていく。掌がきつく肉芽を圧迫する。押しつけながらぐにゅぐにゅ擦った。

「くっ、ふううう……っ！　ふ、ふごいいっ、いいい……っ」
クリトリスをほしいままに転がした。そこから肉悦の衝撃が脳天に何度も叩きつけられ、涎がハンカチに染み込んで淫蜜に混じっていく。
くちゅくちゅくちゅ……。ぬかるんだ牝本体が激しく擦られる音が路地裏に響き、クレイアは頬染めた顔を上げるように背筋を弓なりに反らした。
（あああっ、こんな、劣情に任せた快楽など、い、いけないのに……）
小さなショーツが内側の淫靡な指の蠢きで波立っている。気付けば、もう片方の手がぷるぷる揺れる巨乳を掴んでいて、強い刺激を求めるように立てられた爪が柔肉に減り込んでいた。
――欲しい。気持ちいいの、もっと、もっと欲しいぃっ――
もはや止められない。腰がセックスそのままのドスケベな前後のくねりを見せて、たわわな尻肉が壁を叩いた。
「ぷはぁっ、もう、はあああっ、だめ、だめぇえええっ！　こんな街中で、変になっちゃうううっ！」
ハンカチを吐き出した唇から涎がだらだら漏れていく。眉間を寄せて、泣き出しそうな堪らない切ない顔を見せ、女聖騎士は身悶える体を震わせる。淫蜜塗れのぷにゅぷにゅした肉ビラを指間にきつく挟み込んで、無茶苦茶に震わせる下品な悪戯に酔った。

ザイルは背後へと回った。

丸見えのはず。舌ベロを出したような興奮に膨らんだぐにゃぐにゃと猥褻な形状の肉ビラ。そこから淫蜜の涎を滴らせる貪欲な浅ましい女陰。

（いやぁっ、私の、一番いやらしい場所……。そんな、じろじろ見ないでぇ……っ）

アナル孔がヒクついてしまい、彼の熱く焦がすような視線はそちらに移っていく。悦びと興奮に顔を引き攣らせるようにして、ザイルはそこに食指を伸ばす。

「はうっ！　はああぁっ、だめっ、だめぇっ！　そ、そんなとこ、汚いぃっ」

甘い腸粘膜の香りを立たせるくすんだ桃色の皺目に添って、掻き毟るように指先が蠢いた。

「おや、おや、牝犬が人様の心配ですか？　嬉しそうに腰を振っているくせに……」

「ああ……っ、そんな、嘘……」

指先がアナル皺を幾度と震わせ、もどかしいような微かな痒みと甘美な悦楽が広がっていく。痺れて力が抜けて、甘えるように腰を振ってしまっていた。

下卑た二人の笑みを浴びながら、弄ばれて牝犬の反応を楽しませている。尻孔が他人に触れられるのは初めてだ。これまでの男はその魔悦を教えてはくれなかった。唇から涎を漏らして、顰める眉に恥辱牝は快楽を示す。ガクッと腕からも力が抜けて、桃色に染まった頬を地につけた。クネクネとお尻を振って、それが理性でもう止めることができない。

ここからスタート！
（ページ）
ちょっと試し読み

「ほら、物欲しそうにお尻の孔が捲れてきた。じゃあ、こいつを銜えさせてあげますよ」
ズブッ！　ズブブッ！　硬質の棒状が抉り込んでくる。
「ひいっ、いいっ！」
とろんと落ちていた瞳が一瞬で見開かれた。強烈な異物感が腸粘膜を苛んでくる。聖女とも呼ばれた彼女の排泄孔に鞭の柄がぶち込まれたのだ。
（いやぁあっ！　お尻なんて、普通じゃない……っ。くっ、ううう、痛い、痛い、痛いいいっ！）
だが自分が変態であったことを直に思い知らされる。
「ほうら、尻尾が生えてきた。はあ、はあ……、もっと奥まで……」
グッとザイルの腕に力が込められ、アナル皺が減り込んで、強引に拡張される痛みに吐き気さえ感じた。それが犯されている気分を高めてしまう。すると、
「ふあ……っ、はあ、はあぁあ……ぁ」
表情に恍惚とした悦楽が戻ってくる。異物を慣らすように深く呼吸していくと、押し広げられる痛みから妖しい快痺が湧き起こった。吐き出すように少しだけ鞭柄は逆流し、その遅々たる動きにジーンと感じてしまう。アナル皺が再び捲りあがった時には、お腹の硬い物から焦らされるようなもどかしささえあった。
「ぁふぅっ、うん……。ああ、変なの、お尻が熱くて、はあ、はあ、お尻なのに、き、汚

いところなのに……、はあぁぁ――っ」

「ああ、クレイア、なんて気持ちよさそう……。犬畜生でも、こんな場所で感じたりはしないというのに。貴女は、いや、お前はもう犬以下の、変態牝だ」

自分の肉裂から、だらだら牝汁が垂れ流れていくのが分かる。心が喘いで涙が滲んだ。排泄孔なんかで感じてしまい、その変態な姿を二人の男の前に晒してしまっている。その羞恥にさえ、牝肉は悦びに打ち震え、

――もっと、恥ずかしくさせて――

と悶えてしまう。

「さあ、立派な牝犬になったところで、お散歩しましょうか」

首輪を繋いだ鎖がぐいっと引っ張られ、四つん這いのまま庭中を回される。ぷるんぷるんと豊満に実った乳房が揺れて、柔らかく叩きあった。進むたびに腸内が棒状に擦られるようで、悶えるように大きくお尻を振ってしまう。体はずっと火照ったままだ。淫蜜を垂れ流して、進んだ道筋を残し、時折吹いてくる風が生殖器も丸出しの裸であることを思い出させた。

（はぁぁぁ……っ、凄い、恥ずかしいこと、はあ、はあ、しているのだわ……）

恥辱の快楽に堕ちていきそうになったその時だった。

（獣の臭い……。はあっ！　ああ、馬だわ。近づいてる⁉）

蹄の音が聞こえてきた。この辺りに野馬が駆けることはない。誰かが馬に乗ってこちらに近づいてきているのだと分かった。

鼓動が急速に高鳴り、体に震えが走った。馬に乗った上からの視点なら、囲いなど簡単に乗り越えてこの庭の中を覗くことができるのだ。

「どうしました、クレイア。さあ、こっちです」

這う速度が遅くなると、ググッと強く鎖が引かれる。

「いや、いやぁ……。馬が……、誰かが来ますぅっ」

「だから、どうしたというのです。貴女は、変態なのでしょう。いや、牝犬が何を気にするというのです。さあ、こっちだ！」

変態でなければならない。その重い枷に引かれて、牝犬聖騎士は一本の太い木の下に連れてこられた。幼い頃、お転婆な彼女はここでよく木登りして父を心配させたものだ。

「よし、犬なら犬らしく、ここでオシッコしなさい」

赤らんだ顔が一瞬だけ蒼白になる。誰かが馬に乗ってここに近づいてきている。牝犬になった四つん這いの格好で、乳房も恥部も剥き出したまま、放尿する姿。それを誰とも分からぬ人にまで、晒してしまわなければならない。

（そ、そんな……。そんなこと……）

想像した途端、全身からどっと汗が噴出した。頬はまた桜色を帯びて、泣き出しそうに

顔を歪めて、それなのに棒状を銜え込んだアナル孔がヒクついてしまう。肉芽は更ににゅっと突き伸びて、呼吸が興奮に乱れていた。

「はあ、はあ、はあ……」

クラクラと視界が霞む。どうせ逃れられないのなら……。

囲いの方にお尻を向けて、牝犬らしく片足を上げた。今の彼女に相応しいオシッコの格好で、牝汁でヌメヌメした肉裂を開く。

蹄の音がだんだんと大きくなってきた。濃厚な牡馬の臭いは、もう間近に迫り、囲いの端に到達しているのだと分からせた。

（ああ、お願い……。こっちに気がつかないで……）

だが、そんな表層の想いと牝肉の期待は正反対だった。

馬の足音が丁度クレイアの濡れそぼった陰部剥き出しのお尻の向こうで止まった。

「いやぁあああっ、見ないでぇ――っ！」

青色の瞳から涙を零し、その叫びと同時に、

プシャァァァァァ――ッ！　弧を描いて小水が噴出した。

「ひゃあっ、いや、いやぁあああっ、おしっこっ、だめぇえええっ！」

充血した肉ビラを震わせて、大量に黄金水が迸る。興奮したにやけた笑いが降ってきて、強烈な羞恥に打ちひしがれながら、膣道が激しく顫動した。恍惚感に唇から涎が漏れてい

く。子宮が堪らなく痺れた。

「ふあっ、はああっ、あはぁあああ……っ、はああ……っ」

――イっちゃうっ、イク、イク、イクぅううっ――

恥辱快楽の激流に飲み込まれ、狂うように喘いでも溺れてしまう。ビクビクッ！　桜色の染まった全身を何度も痙攣させながら、牝犬の体はこれまでよりもずっと深い悦楽に浸っていった。

「ははは……っ、見ましたか、あの男の顔」

「ええ、なんとも、驚いていましたね。ですが、我々の顔も……」

「いやいや、クレイアさん、いえ、この牝犬の方ばかり見てましたから、こちらは眼中になかったでしょう」

恥辱快楽の渦に飲み込まれていた意識がようやく浮かび上がってきた時には、そんな二人の会話が聞こえてきた。まだ体中が快熱に包まれて、心地良い気だるさがある。あの六つの目に見つめられながら放尿した瞬間を思い出すだけで、すぐにでもエクスタシーの本流が雪崩れ込んできそうだった。

（はあぁ……ぁ、私……どこまで、堕ちるの……）

とろぉっ、と尋常でない大量の蜜溜まりが牝ヒダの合間から落ちていく。自分で気付かぬうちに、あの時、小水と共にこちらも噴出していたのだろう。

「ザイルさん、随分と股間が腫れ上がってらっしゃるようで……」
「えっ、ええ……。コルネオさんこそ……」
はははっ、と大きく審問官は笑った。それはニヤリとしたものに変わって、彼は庭の芝生に仰向けに寝転がる。
「何をして……？」
「申しましたように、彼女は実に献身的なお方だ。痛々しく腫れ上がった男のチンポを見て、放っておけるはずはないのです」
劣情に濁った男の視線が牝犬騎士に移った。彼は期待に満ちた瞳を向けたまま、股間を剥き出しにする。
「ああ……っ」
黒々とした肉棒が硬直しきった状態で現れる。醜悪にゴツゴツと血管が浮き上がり、カリ高い先端の鈴口からぬらぬらと牡の淫水を先走りを漏らしていた。咽返るような濃厚な陰茎臭が、庭を満たした自分の猥褻な女のそれに混ざり込むと、それは半月ほど前に初めて嗅いだあの花の香りそのものだった。
急速に口内に唾液が溢れて、腰からふわふわと浮き上がるような感覚が湧いてくる。イったばかりの体が物凄く欲しがって、牡の味を覚えた肉壷の内側が堪らなく疼いた。
「ぁふあっ、はああん、うはぁああ……」

体中から締まりがなくなって、孔が弛緩していく。完全な牝犬になっていくのが分かった。桜色の全身から気をやった時のように汗を噴出し、乳首と肉芽に快痛が走り、理性が霞む。

――欲しい、欲しい、オチンポ欲しいっ――

男の腰の上を跨いでいた。硬直しきった肉棒を握り締めている。

「はあ、あんっ、とっても、熱い……」

垂直に立てた強張りの上に牝汁をぬちゃぬちゃ滴らせ、ヒクつく蜜壷をあてがっていく。

ぢゅぶっ！　ぬずずずっ、ぬぷぅっ！　貪欲に欲しがる腰が沈み込んだ。

「ぷはぁっ！　あはぁあああ――っ、チンポいい……っ！」

蕩けきった恍惚の顔から、唾を飛ばし、だらだら涎を滴らせる。牡牝の結合部から牝汁を飛沫をあげ、一気に抉り込ませた圧楽に酔ってしまう。弛緩していた膣粘膜は、男を銜え込んだ途端に、ぬっちょりと肉棒に纏わりついて、刹那の間に締めつけ始めた。

「はあああっ、美味しいぃっ！　オチンポ美味しいぃいいいっ」

ぬっぷっ、ぬっぷ、ぬっぷ、ぢゅぶぢゅぶっ！　四つん這いの犬のまま、白くムチムチしたお尻を淫乱になって波打たせる。ゴツゴツした肉茎に膣が何度も激しく擦られ、蜜孔は幾度も捲り上げられ、減り込まされ、絶え間なくぬちゅぬちゅと淫蜜漏らす卑猥な光景を見せていた。

「す、凄い……。ああ、私も……」
止まらぬ腰動が後ろから捕まえられた。若い書記官の汗ばんだ指先がたぷたぷと柔らかな尻肉に食い込んでいく。
「はあ、はあ、こんなものより、もっといいものをぶち込んであげますよ」
ドスケベな牝犬の交尾を見せつけられて、ザイルの牡衝動は煽られた。尻孔に飲み込まれていた鞭柄が一気に引き抜かれ、その直後、
ずぶぅっ！　ずぶぶぶっ！　もっと熱いものが埋めてくる。
「くはあっ！　ふあっ、はあああ……っ、お尻いっ！　おひりも、いいいっ！」
異物に鞣されていたアナルは腸液が溢れていた。いとも容易く根元まで滑り込まされ、快楽の衝撃が脳天まで響く。下腹部が満たされ、二孔が拡張される悦びがズンズンと激しく叩きつけてきた。牝犬は淫乱に腰を振って嬉しがり、ぷるん、ぷるん、と巨乳を大きく揺らしてしまう。全身の朱色に染まった柔肌から珠の汗を弾かせて、金髪を振り乱してはアヘ顔を見せる。
ぬぢゅっ、ずぶぶっ！　ぬっぷ、ぬっぷ、ずっぷぅっ！
腸壁が何度も抉られる真下で、膣粘膜のヒダヒダがカリ首に震わされ続けた。肛姦と膣姦の二重奏が脳内に響き渡り、
――気持ちいい、気持ちいい、気持ちいいっ！

それしか考えられなくなった。
「ふひゃあああああっ、いいいいっ、狂っちゃっ、狂っちゃうぅうううう！」
快楽一色の知覚の中で、過敏な肌が感じ取る。
（はへぇえっ⁉　な……に……？　ふあっ、ああああああっ！）
視線があった。結合した二人の男のものではない。少し遠くに、でも強烈な劣情が込められた邪な熱いものだ。
「あはああっ、覗かれへるぅううっ、見てるっ、見れるぅううう！」
囲いの柵の隙間に誰かの瞳があった。一つや二つではない。悦楽に霞んだ思考では確認できない。沢山ある。それだけだ。
牝犬の淫らな叫び声と周囲に発散された濃厚な猥褻臭が男達を呼び寄せていた。庭の囲いの向こう側から牡の生殖器の臭いが無数に混じってクレイアの鼻腔に届く。そこにツンとした強烈なものが混ざった。
（はあああ、臭いいいいっ！　臭くてクラクラひちゃうぅうううう……っ）
ザーメンの臭いだった。ドスケベな変態牝の交尾を見ながら、彼らがオナニーしているのだと分かった。
嬉しくて、嬉しくて堪らない。
「うはぁあああっ、見てぇえええっ！　クレイアは、変態なのぉおおおっ、牝っ、牝犬

になっひゃっちゃったのぉおおおっ！」
ぢゅぶぶっ、ぬぷっ！　ぬっぷ、ぬっぷ、ずぶぶっ！
浅ましくイキまくる姿を見て欲しくて、もっと激しく腰を振りまくる。途端に、
「あひっ……ふあぁああっ、イ、イク……ぅっ」
ビクビクッと身体が痙攣を起こした。だが止まらない。貪欲に牝肉が欲しがってしまう。
もっともっとイキ続けたいと唸って、直腸と膣で肉棒をしゃぶりつくす。
「おおっ、す、凄い……、くうっ、も、もう……」
若い書記官が射精の欲求を訴えだした。
「ははは、最高だ。こ、この変態女……。はあ、はあ、ぐっ、うう……」
下からの突き込みも苛烈さを増す。
肉壷で感じまくり、アナルの悦びも堪能し、大衆に見られる恍惚が加えられ、それらがどろどろに溶けあって、えぐいほどの無上の快感に牝犬騎士を狂わせる。
「いっ、イクぅううっ！　またイクぅううっ、変態イっちゃうぅ――っ！」
悦びの涙を流して仰け反った。直後に、また全身がいやらしく波立つようにくねり、ぶるんぶるんと揺らされる巨乳から汗が迸る。アナル皺と膣孔が蠢き、腸液がだらだら垂れ流れ、牝汁がぶしゃぶしゃと噴出していった。
「はあ、はあ、もう、出そう……です……」

「で、では、この牝犬に、くっ、はあ、彼女の大好きな、臭いものを注ぎ込んでやりましょうぞ！」

ぬっぷぷっ！　ぢゅぷっ、ぢゅっぷ！　ずぷぷぷっ！

男達の終わりを予見して、もっともっと、と牝犬はドスケベに腰を振りまくる。肉棒の太さのまま押し広げられたアナルとヴァギナが、

ぐちゅ、ぬちゅ、ちゅぷ、ぢゅぷぅっ！

と喘ぎ泣く声を上げ、たわわな尻房を激しく揺らし狂わせた。

「ちょうらいぃいいいっ！　くっさいのをぉおお――っ、ほひいぃいいいいっ！」

自宅の庭で前と後ろを同時に犯される二本挿し。悦び喘ぐ変態牝の姿を幾人にも覗かれ、晒して、激しく抉られる恥辱の幸せに、何度も何度も絶頂に達してしまう。

「イぎまふうぅうううう！　アハぁああ――っ、ふあああっ、イグうううっ、くしゃくてぇっ、イグ、イグうううううううっ！」

だらしなくだらだらと涎を漏らし続ける淫乱牝犬。ぐちょぐちょの二孔が双棒に苛烈の擦られ、抉り込みがまた激しく牝肉を叩いた。

「さあ、牡の臭いに、狂い逝けえええええ！」

アナルとヴァギナのぬちょぬちょの孔粘膜が、強張りを同時にきゅっと締めつける。

「ひゃはぁあああっ、まら、来ひゃうぅうううっ――っ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/